

フォーラム

会長総会挨拶

私が地理空間学会の初代会長に推薦されたのは、東京教育大学・筑波大学出身の国立大学の現役の教員としては人文地理学の分野において最年長の部類になったことによるものと思われまます。先輩の斎藤功先生はすでに筑波大学を離れ、長野大学に移ってしまいましたし、大学・大学院時代に同期であった石井英也先生はついこの間、つくばで退職祝賀会を行いました。埼玉大学の教員の定年は65歳ですので、定年まであと2年ある私のところに地理空間学会の会長職が回ってきたのかと思っています。

本日、地理空間学会の設立総会がここ大塚の茗溪会館で開催されたことは、本学会が茗溪の伝統を受け継いで発展していこうという意気込みを表したものだと思っています。私が大塚にあった東京教育大学で地理学を学び始めたのは、実に45年前であります。入学したときの人文地理学の教授・助教授は青野、尾留川、幸田、浅香の先生方であり、これらの先生方から人文地理学を学びました。それ以来、人文地理学の基本的な考え方は変わらないものの、分析手法やパラダイムは大きく変化してきました。

地理空間に生じる現象を把握する方法の技術的な変化は身近なところでは、GISの普及とカーナビゲーションの進歩に示されていますし、さらにインターネットの世界ではグーグルアースによって空間情報を地図と衛星写真によって整理することができるようになりました。しかし、空間情報の重ね合わせの考え方は、地理学において地図を重ねて現象の関係を探るといって、古くから用いられてきた方法に基づくものです。技術の進歩によって、地理学の基本的考え方が幅広く応用されるようになったものと考えられます。このような空間情報の処理の発達を反映して、地理学への関心が増加し、アメリカ地理学会(AAG)の会員数は2000年の約6,000人が、2007年には

10,000人を超えるようになりました。

先月、私の出身校の岩手県の一関一高の卒業45周年の同期会が東京で開催されました。そこで、私の専門分野は地理学であると話したところ、今問題となっている環境問題についてももっともっと発言して下さいと意見を言われました。一般の人びとでも、地理学は環境問題を扱っているという認識があり、我々はそれに答えていく必要があると思います。

一方では、最近の新聞紙上でも話題になりましたように、学生の地理的知識の乏しさは「どげんかせんといかん」ということになります。宮崎県の位置を地図上で答えることができる高校生の割合は43%だけ、イラクの正答率も高校生では5割に達せず、地理教育の充実を図っていかねばなりません。地名とその場所の認識は空間的に思考する際の基本です。本日、出席の皆様の中には私のアメリカ地誌の授業をとったことがある人がいると思いますが、私はアメリカ地誌を教えるときに、アメリカの50州を必ず覚えさせるようにしています。50州の名前と位置を覚えていなければ、地誌の情報を空間的に整理することができないからです。場所を特定してその地誌的記述をする場合にも、場所の位置を知らなければ、そこ周辺との関係の理解が不十分になってしまいます。空間的理解にとって、地名を覚えるという基本的なことが必要です。さらに、多様なグローバル化を理解するためにも、地理的知識を欠くことができません。

現在、編集委員長の山本正三先生のもとで朝倉書店の『日本の地誌』シリーズが刊行中であります。この編集委員の1人として、多くの原稿を読んできましたが、『日本の地誌』というタイトルで、地誌を書いて下さいと依頼しても、地域の地図もないような原稿もあり、地誌の意識が少ないという印象を受けました。地域の体系的・説明的記述の意義を忘れてはならないと思います。

例として挙げました、これらの分野をはじめと

する様々な分野における地理学の研究活動の活性化と発表の機会を、この地理空間学会が提供していきたいと思っています。

新しい地理空間学会の発展のために皆様のご協力をお願いして、私の挨拶とします。

地理空間学会会長 菅野峰明

地理空間について

記念すべき創刊号のフォーラムに、誌名であり学会の名称でもある「地理空間」について何事かをしるせという依頼があったのは、この言葉とのつきあいが編集にかかわる者たちのなかで最も親密であったせいである。最初のつきあいは、大学院の修士課程にすすんだばかりの1974年にさかのぼる。伊豆の下田に泊りがけで、オリヴィエ・ドルフェス『地理空間』（山本正三・高橋伸夫共訳、白水社〔クセジュ文庫〕、1975年）の下訳修正作業に加わったのである。前半の序論から第四章まで、ちょっと気取って抽象的なフランス語と格闘した数日間は、地理空間という言葉にかかわる幕開けであった。

当時、地理空間という言葉は、フランスの地理学界をいわば席卷していた。1972年に創刊された学術雑誌 *L'Espace Géographique*（地理空間）は、地理学における新しい流れや論争の中心的存在として、伝統ある *Annales de Géographie* 以上に権威のある雑誌とみなされていた。また、筆者のフランス留学（1976～78年）を受け入れてくださったパリ第一大学のパンシュメル教授は、この地理空間という言葉のみずからの地理学思想の中核にすえていた。1980年の国際地理学連合（IGU）東京大会で来日されたパンシュメル先生は、筑波大学まで足をのばされ「地理空間をめぐる」という学術講演を行われた。弟子であるわたしは事前に手渡された原稿にもとづいて通訳係をつとめ、後日、それを「地理空間の特質と概念規定」と題して人文地理学研究の第5号に掲載した。

しかし、フランス以外の国では、地理空間とい

う言葉や理念はそれほど深く浸透しなかったようである。日本でも、ドルフェスの訳本はそれなりの注目をあつめたが、地理学者の世界で「地理空間」という言葉が多用されることはなかった。アメリカやイギリスの地理学辞典をみても、*geographical space* という用語が項目化されることはなさそうである。そこで以下では、フランスにおける地理空間概念の展開について概観し、ついで、なぜフランスでかくも熱心に「地理空間」が語られたかについて、わたしの解釈を述べることにしたい。

フランスの地理学にとって、地理空間は比較的新しく登場した言葉である。空間的な広がりとは伝統的に地理学の重要な関心事であり、それにかかわる用語（*lieu* や *région* など）は地理学のキーワードとして古くから重視されたが、地理空間（*espace géographique*）が使われだしたのは1960年代のことにすぎない。したがって、1972年に学術雑誌「地理空間」が創刊されたとき、それは地理学の新しい流れをしめす革新的な表題であった。

容易に想像できるように、フランスでの空間概念の導入は、アメリカやイギリスで盛んであった新しい流れ（*New Geography*）を反映していた。それはカナダのフランス語圏地理学者を經由して輸入されるとともに、フランス本国の若手地理学者にも多くの信奉者をうみだした。さきに言及したパンシュメル先生は、すでに指導的地位にあり若手とはいえないが、*New Geography* の成果をフランスに紹介することに熱心であった。*New Geography* を代表するハゲットの名著 *Locational Analysis in Human Geography*（1965年）のフランス語訳は1973年に出版されたが、パンシュメル先生はその刊行に尽力され、出版にさいして序文を執筆している。ただし、わたしがフランスに留学した1976年当時は、いわゆる伝統地理学の雰囲気がつよく、「計量地理学については日本のほうが進んでいる」と若手の地理学者にいわれたことを覚えている。

地理空間の概念は1960年代の末にフランスで登場し、1970年代を通じて、地理学を基礎づけ

る中核的な概念とみなされるようになった。それ以降のフランスでは、地理学のフレームワークを論じるさいに、多くの研究者が「地理空間」を主要なキーワードとしている。しかし、アングロサクソン流の New Geography から影響を受けたとはいえ、その後の展開をみると「空間」の位置づけがアメリカやイギリスとは微妙に異なるように思われる。そもそも英語圏の地理学では、空間が spatial という形容詞で使われることが多いのではなかろうか。spatial view, spatial analysis, spatial organization などである。これらに対応する表現はフランスにもあるが、それほど幅広く用いられていない。これに較べると、地理空間はほとんどの地理学者に共有されている。自然環境や地域、景観などと同じように、地理学を基礎づける概念として広く受容されているようにみえる。ただし、幅広く受容されているだけに、その概念内容は研究者におうじて多様である。

地理空間という言葉が、みじかい期間でさほどの抵抗もなくフランスの地理学界に受容されたのは、それが伝統的な発想と重なる側面をもっていたためである。初期における地理空間概念の把握は、たとえば先述のドルフュスの著作にうかがうことができる。ドルフュスによれば、地理空間とは「広義には（中略）地表および生物圏のことであり、狭義には人類の居住空間（エクメネ）」のことである。それは日常的で、きわめて具象的な空間を意味する。パンシュメルによれば、地理空間は「地表のあらゆる現象がそこに刻みこまれている一体的な空間」である。経済空間が経済的側面だけを抜きだした抽出度の高い空間概念であるのに対して、地理空間はすべての現象が刻みこまれた具象的な空間である。このような捉え方は、近代地理学の出発点であるリッターの主張（「地的に充填された地表空間」が地理学の研究対象であるという観点）と、みごとに一致している。地理空間という新しい言葉に伝統的な発想を盛り込んだわけで、新しい皮袋に古い酒を注いだということもできる。

ただし、地理空間の理解がその範囲にとどまっていたわけではない。1997年に刊行された『人

文地理学辞典』（朝倉書店）には「地理空間」という項目があり、わたし自身がそこに次のような解説を付した。

「地理空間は、具体的には地表のことである。地表という概念は、従来から地理学の研究対象を示すものとして重視されてきたが、地理空間という語には、対象としての地表に加えて、方法としての空間的視点が含意されている。すなわち、地理空間という場合、その空間構造や空間組織を明らかにすることが研究の中心になる。したがって、地理空間概念の普及は、計量革命以後の新しい地理学が空間的視点を重視したことを反映している」（p.306）。

さらに、地理空間概念から具象的な研究対象の意味を排除して、抽象的な空間モデルの意味だけに特化させる用語法もある。たとえばドーフィネによれば、地理空間は地理学者が科学的手順にしたがって構築する抽象的な理念（概念モデル）である（Dauphiné, 2001）。このような立場から、かれは研究対象をしめす「地表空間」と概念モデルをあらわす「地理空間」を区別して用いている。このように「地理空間」という言葉は、フランスにおいて右から左まで、きわめて幅の広い使われ方をしたのであり、その点で「地域」や「景観」などの言葉とよく似た性格をもっているのである。同時に、そうしたウイングの広さが、地理空間という言葉の成功をもたらした理由であろう。

フランスにおける「地理空間」概念のこのような展開から、われわれはどのような教訓をくみ取るべきであろうか。新しい学会を立ち上げるにあたって、「地理空間」という言葉を採用したことは妥当な選択であったろうか。もちろん、それは今後のわれわれの努力にかかっている。しかし、個人的な印象をいわせてもらうならば、現在の状況のもとで、それは絶妙のネーミングであるように思う。

フランスの地理学界において、地理空間はいわば同床異夢の旗印であった。掲げる言葉は同じでも、その考える内容は多様で、きわめてバラエティにとんでいた。逆にいうと、これだけ多彩な考えかたをもつ地理学者たちが「同じ」土俵のうえで

論争しあい、また、みずからの主張を展開しあった。われわれの機関誌「地理空間」には、日本の地理学界のなかで、今後そのような役割を期待したい。地理空間学会は、人文地理学や地誌学、空間情報科学、歴史地理学、文化地理学、地理教育など、多様な分野が協力しあうことで誕生したものである。これらの分野を包摂するネーミングとして、地理空間はまことに適している。フランス語の地理空間は「地理的空間」を意味するが、日本語の地理空間は「地理・空間」と解釈することもできる。さらに柔軟な解釈を許容するわけである。それぞれの分野、それぞれの研究者が、みずからの目線で地理空間を論じ、みずからの地理空

間モデルを提示する場が「地理空間」であろう。百家争鳴、百花斉放を期待している。

(手塚 章)

文 献

- ドルフュス, O. (1975):『地理空間』白水社 文庫クセジュ578. Dollfus, O. (1970):*L'espace géographique*. PUF
- パンシュメル, Ph. (1981):地理空間の特質と概念規定。筑波大学人文地理学研究, 5, 231-237.
- Dauphiné, A. (2001): Espace terrestre et espace géographique. In: Bailly, A. S. ed., *Les concepts de la géographie humaine* (第5版). 51-62, Armand Colin.